

诗

12  
2020

诗刊社(北京)



# 飛 距 離

能村 研三

塞翁が馬の年

二〇二〇年。東京オリンピックが開催されること、「沖」が創刊五十周年を迎えることから、この輝かしい年に向かって何年も前から期待と希望を持っていた。

年が明けて二月、糖尿病の検査数値が芳しくないため、検査教育入院を余儀なくされた。二週間余り病院に入院中、世の中ではコロナウイルスが徐々に蔓延し始め退院後も外出が出来ない自粛生活が始まった。

病院では食事と生活習慣の指導を受けたが、これを実践するには絶対好の機会で、普段の酒量を抑えることと適度な運動を日課として続けたことで、正しい健康管理ができるようになり、検査数値も良好に回復した。

一同に会しての句会はほとんど出来なくなり、紙上句会が続いた。通信形式の句会は、直接人が集まれないが、普段句会に来られない人も多く参加してくるので、この点は良かったように思う。

六月には待望の「沖」のホームページが開設され、情報を瞬時に多くの人に伝達できるようになり、コロナ禍で人と人との接触できない中、こうしたツールの有難さを改めて認識した。

播粉木の根気を尽くす暮秋かな  
誉め言葉割り引いて聞く煙草  
濡れてなほ水引草の散らし紅  
後手に閉める枝折戸今日の月

板わさは蕎麦屋の肴無月かな  
霜降や当てなく延ばす祝ひ事

夕間暮れ菊人形に血の気さす

断崖へ飛距離を延ばす朴落葉

黒々と山巒しまり獵期来る

蕎麦湯乞ふ頃合ひなりしひとり席

また、オンラインによる「沖」の打ち合わせや、地方の人たちと距離を越えての小句会が出来るようになったことも、これまでの日常では考えられないことである。

今年はいろいろな事が困難の中であったが、「沖」同人の方の句集で、齊藤實さんの『百鬼の目玉』、磯貝尚孝さんの『黄落』、宮坂秋湖さんの『夏椿』、河野美千代さんの『国東塔』、小河源清江さんの『椰の木』、広海あぐりさんの『すみだの風』がそれぞれ出版されたことから、「沖」の間断のないパワーを感じることが出来た。

五十周年記念大会が来年に延期されたのが残念であったが、編集部への奮励努力により三百五十六ページの記念号を刊行できたことはすばらしかった。

いずれにせよ、今年も誰かが今までに経験したことのない年であったが、ある意味では塞翁が馬の年であったようにも思える。

来春は、私の千支の年となるが、五十周年の余勢をかって私の第八句集と『能村登四郎の百句』の刊行を予定している。

能村 研三

# 鴟の舌打ち

森岡 正作

## 冬百舌鳥と

登四郎先生の『咀嚼音』に「冬百舌鳥となりて墓域をいづるなし」という句がある。盛んに飛び回っていた百舌鳥も、冬になつて墓守りに徹しているイメージである。

わが家の裏庭にある少しばかりの竹林にも、ここ毎日朝夕を問わず百舌鳥がやって来る。そして、頭抜けて高く、枯れかけて葉もない竹の天辺に止まっている。竹の春にしてはみっともなく自立ち、根もぐらぐらしているので、伐ろうと思つていた竹だが、天辺で吹かれていた百舌鳥が、一匹狼の浪人のように格好良い。

それで、時には辺りを睥睨し、警備の警官が笛を吹くように鋭く鳴き、また、苛立つようにタタタタツと舌打ちを始める。獐猛な小鳥で「鴟の贄」という季語もあり、雪国では贄のある高さで積雪を予想するといふ言い伝えもある。

毎日飛来しては、私の怠惰な脳を刺激するこの孤高の百舌鳥を、何とか一句に仕立て上げたいと思うが、なかなか手強いのである。

尖塔の十字架釣瓶落しかな  
いつよりか遠見癖あり雁渡し  
真水切る太き腕や新豆腐  
十六夜の厨に古るる大黒天  
碧なす全集本やすがれ虫  
夕映えに鴟の舌打ち何かある  
身に入むや納戸の奥に鉄兜

# 飛鷹選評



能村 研三

満月のゆがみなきこと畏るるや 矢野美沙子  
今年の中秋の名月は十月一日であったが、この日の月は満月ではなく、翌日が満月であった。ゆがむことのない真ん丸な月の完全性は日本人の美意識をかきたてるものである。多分若い時には、そんなことは感じなかったかも知れない。畏敬の念を抱かせる見事な満月に圧倒され、今にして不思議なパワーが液るのを感じる。

漆黒の空に根を張る稲つるび 澤田 英紀  
発想力の豊かさに驚いた。「稲つるび」は、「稲が雷光と交わり交尾む」の意である。雷と稲妻、雷鳴轟く、稲妻が空を裂くと言うように、雷は音、稲妻は光を意味する。季語として使うときには「雷」は夏、「稲妻」は稲を実らせる光の意味から秋となる。そんなことを踏まえてこの句が出来たのだろう。漆黒の空に光った稲妻を「根を張る」と捉えたのはすばらしい。

民芸の手業さながら藁こづみ 遠城 健司  
「藁こづみ」は新藁を円筒形に積み上げたもので、藁にほ、藁塚などとも言う。近年、稲刈りはコンバインが主流となり、

少年に端境期あり青蜜柑 小坂 尚子  
端境期とは「古米に代わって、新米が市場に回り始める時期。物事の新旧が交代する時期。入れ替わりの時期」とある。子供から大人への端境期というと小学六年生あたりを言うのか、多感な思春期を迎える微妙な年頃、まだ黄色味を帯びない青蜜柑の酸っぱさにも似ている。

蓑虫や知らなくてよいこともあり 宮下 桂子  
ことわざに「知らぬが仏」とか「聞かぬが花」というのがある。知れば腹も立つが、知らないから仏のように平静でいられる。最近のテレビでも「知らなくていいコト」というタイトルのドラマがあった。二句一章の句であるが、蓑虫は朝から晩まで木の枝にぶら下がって蓑に籠りきりの特性を季語として活かしている。

肩先の冷ゆるにまかす母の忌よ 小倉 征子  
愛しい人が亡くなった日の季節感が強く印象に残っていることがある。そういえばあの日は「寒かった」とか、「こんな花が咲いていた」という印象がその忌日を裏付ける。肩先から冷えが及んでくる頃、こんな寒い日にも母は毅然としていると面倒を見てくれた。

# 蒼茫集



秋夕焼

大畑善昭

無駄骨

菊地光子

みどり女忌弓張月が雲を出て  
三陸の秋夕焼に染まりゐる  
流木の 大きい白骨秋の浜  
一芸に深み高みや秋澄めり  
\*露や世に吾が在ることも摩訶不思議  
一煙もなく燃えつきし曼珠沙華

\*キューピーの中の空洞秋澄めり  
無駄骨といふ骨のなく月煌煌  
一切の色を許さず新豆腐

初倉の跡の日だまりちちる虫  
夜の長し一言で足る夫のゐて  
天高し伴走に鳴る腰の鈴

えいさえいさ

辻美奈子

こつそり

千田百里

えいさえいさと芋虫の尾の進む  
針なくて赤い羽根ちよとつまらなし  
秋思にはかに快速の通過あと  
\*星の数のうちの一人やひたに冷ゆ  
暁の如く石榴の割れそむる  
メガソーラー地球に優しきこと冷まじ

\*秋日傘こつそりモネの女となる

舞茸を舞はせてもみむ厨なら  
紅葉川これぞ水鏡の絵巻  
粧へる山のもてなし蛇笏の忌  
はらからの半分は去り身にぞ入む  
秋の声反物しゆるる巻き取れば

坂多き街

高木嘉久

\*地図に無き路地こそ昭和昼の虫  
坂多き街に坂選り今日の月  
運動会レコードに針乗せし頃  
色変へぬ松や庭師は法人に  
マドラーを止め虫時雨聴いてをり  
同輩は無職に慣れて菊大輪

見ゆるもの

田所節子

種を採る黒に秘めぬし未知の色  
小鳥来る雨後の日ざしを誘ふかに  
百疊に風吹き抜くる秋彼岸  
新豆腐水の甘さと思ひけり  
\*鳥渡り齡重ねて見ゆるもの  
草市に軽きもの買ふ寂しさよ

秋の天

宮内とし子

\*江の島を鯨と見たて秋の天  
しるがねの波に飲まれし芒原

ヴァイオリンの余韻を抱く良夜かな  
牧は秋馬の名のある飼葉桶  
連山の影かぶさりぬ秋桜  
年輪を増しゆく樹々に小鳥来る

ブルーブラックインク 頓所友枝

潮入りの池を眼下に松手入  
雁渡し一人身幅の切通し  
秋茄子女房詞は隠語なり

\*ブルーブラックインク秋へ書く手紙

沖誌・十月号  
干茸の箱一杯の香を開く  
五十年の重み掌に受く菊日和

姫の重さ 甲州千草

つんと来てつつんと離る鬼やんま  
蓮の実のきつと飛んだり水笑窪  
厚みある本の温もり黄落期  
老木の落葉の許に眠りたし  
新米の姫と呼ぶるこの重さ  
\*帰宅後の二人の喪服火恋し

# 潮鳴集



ひときは燃えて

本池美佐子

満天の紅葉明かりや九十九折  
畳屋の軒の深さよ秋時雨  
父と子の揃ひのシャツや鯨日和  
\*月天心舞台装置のやうな街  
隠沼にひときは燃えて曼珠沙華

さみしがり

町山公孝

\*花梨の実さみしがり屋で強情で  
相席を湯島の月に覗かるる  
退屈を混ぜ舞茸を天麩羅に  
ピーナツをうはさ話の火で焙る  
千年の森のはなやぎ秋闌くる

序 破 急

栗坪和子

\*シャンソンに序破急のあり秋扇  
みづがねの重さに飛べり糸蜻蛉  
葛飾神楽の帰燕神楽の空を行きませり  
さはやかや砦のやうに木の教会  
あなかしこ秋巡礼もその杖も

花すすき

鈴木齊夫

砦守る火群のごとき曼珠沙華  
旅千里一花に憩ふ秋の蝶  
桐一葉駿府に豊の天守跡  
\*花すすき風は自在のジャズピアノ  
かりがねや訪ふ国府の万葉碑

臍の傷

菊川俊朗

\*一斉に月に触れたる踊の手  
酒を酌む座して銀河の端の端  
旅の夜の律儀に鳴れりばつたんこ  
雁渡し橋の一つは交差して  
毬栗や臍の傷なら二つ三つ

秋 桜

大矢恒彦

国境のあらうはずなく雁渡る  
電柱は街の日時計暮の秋  
\*モーツァルトの音符の風に秋桜  
捨案山子日陰にかつと眼開け  
たわいなき一書の途中虫すだく

破 蓮

塙誠一郎

\*守りには入らぬ気合ひ破蓮  
オンライン句会の拾ふ虫の声  
展げたる源氏絵巻や色鳥来  
「様」と「さま」のあはひに惑ふ秋思かな  
薄漁の秋刀魚置かれし後ろ籠

鷹 柱

内山花葉

樹木医の脈みるやうに露の軒  
稲すずめ数の力の民主主義  
雑りつ気なきふるさとの今年米  
\*豊年や辛く煮上げし湖の魚  
潮騒の島暗ませり鷹柱

貝の口

平松うさぎ

錆鮎の鉄重りする網の底  
金秋や加賀ゆびぬきの絹かがり  
虫しぐれ本郷無縁坂暮れて  
\*貝の口締めさもなき暮し糸のこ草  
空気握るか新米の塩むすび

この世を円く

高久 正

\*月光や切箔散れるごとき湾  
散り継ぎてこの世を円く金木犀  
鎮守掃く箒に秋の風立てり  
菩提寺へ覗ひとすぢ曼珠沙華  
目を凝らす紺紙金泥秋の声

# 沖作品



# 能村研三選

山間の暮色に浮かぶそばの花

市川市

矢野美沙子

\* 満月のゆがみなきこと畏るるや

高々と大き円描く帰燕かな

秋天や空にあらざる国境

猫じやらし風とたはむる一日かな

\* 漆黒の空に根を張る稲つるび

黒潮に銀の風巻く大鯛

鯛の声に言霊あるやうな

散りゆくは釈迦の掌桐一葉

群れ咲いて経文となる曼珠沙華

きみどりのみどりきえさり豊の秋

露草の青眼くりくり草の中

\* 民芸の手業さながら藁こづみ

虫すだく酔ひの回ればむかし事

身に入むやウイズコロナといふ新語

草木も吾の影も伸ぶ野分晴

神奈川

小坂 尚子

山の端の夕日こぼれて葉鶏頭

\* 少年に端境期あり青蜜柑

ピロティを吹き抜ける風鶏頭花

万端を整へてなほ穴惑

厄日かな発電風車速まはり

秋日濃し沓脱石に桐の下駄

秋澄むや空鳴らしゆくヘリコプター

月明に綿雲白く浮かびをり

\* 蓼虫や知らなくてよいこともあり

濁りなき水音に深む秋思かな

暁闇やひたすら打てる鉦叩

\* 肩先の冷ゆるにまかす母の忌よ

扇状に水脈のきらめく良夜かな

山房にこゑ張る鳩や朝寒し

市川市

宮下 桂子

福岡

小倉 征子

\* 界限と言ひたき街や秋刀魚の香

月光に合はず身裡の周波数

虫の闇なほ懐しき転勤地

穂芒を灯す河原の斜光かな

秋潮や支流は海と出会はざる

労ひの酒に酔ひたる秋収め

名月や暈の縁に青海波

\* 花房を翳しに葛の気鋭かな

板壁の味噌屋醤油屋秋の夕

唐辛子下がる厨の「火之要慎」

機上より眺む十勝の秋灯

十六夜の名残りの空の青さかな

\* 宇宙人とまがふ土偶や豊の秋

接岸の吃水浅き秋刀魚船

山深く昼は落鮎釣る湯治

煩惱の数ほどは無し烏瓜

\* 鶉鳴くは政子の妬心切通し

マネキンの細きおとがひ秋立てり

無住寺の燐寸の湿り竹の春

眼差にとほきもの秘め風の盆

熊本

河寄 裕二

千葉

関 妙子

中村 重幸

神奈川

加賀 莊介

鯛や谷戸の奥なる坊の宿

爽やかや能管咽ぶ能舞台

\* 比叡から色なき風や通し土間

甲斐路はや秋の兆しの峰の丈

九頭竜川の荒ぶ瀬音や鮎落つる

今朝の秋俎板に音生まれたり

\* 柿日和二駅だけの旅に出る

稲の秋少しづつ青広げたり

岩木嶺の日差し集める柿の秋

コロナ禍の推移見守る九月尽

朝顔や閉店告ぐる小間物屋

種採のあからさまなる手の窪み

\* 秋燕の翼細めてひるがへる

雲あそぶ空はキャンバス秋日和

化粧待つ支度ととのふ葉月富士

水の秋小皿二枚を洗ふにも

天高しトトロ来さうな樹冠なる

虫の声降るやなぞへに沿ふ小道

学校田クラスの数の案山子立ち

歌枕おとなふ旅ぞ水澄めり

青森

千葉 禮子

山梨

長岡 千波

市川市

佐藤 克江